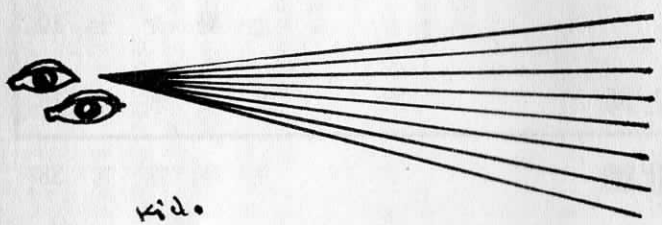
《特集》

# 都市共同体

# 青い空・緑の風そして君よ——



土竜実

ずいぶん御無沙汰しています。その後も皆様元気に御活躍のことと思います。さて、都市における共同体とのことですが、どう書いたらよいものか迷ってしまいます。私達は確かに今、東京という都市に共同生活しているわけですが、〈都市における共同体〉といった形であらたまって考えた事が全然といっていいほどなかったからです。それに、現在の私達にはこうこうだから共同体はこうあるべきだといった統一見解らしきものは存在しません。ですから現在に至るまでと、今何をしているかを私個人の私信という形で思いつくままに書かせてもらおうと思います。

## 〈芽生え〉

御存知かと思いますが、私達の中の二人が「土が欲しいもぐらの会」という共同体についての学習会を呼びかけたのは、七〇年十二月のことでした。その頃目白にFIWCの事務所を借りて、月二回の集会をもったのです。最初三～五人で雑談めいたところから出発して、三月には十数名が集まってくるようになりました。この場合、実際に共同体を志向する人に限ると参加者をしぼりたかったのですが、実情は興味本位でくる人と具体的に共同体をつっこんで話したいという人が半々ぐらいで、ジレンマの中に話が進んだのを覚えています。そのうち、毎回くるメンバー間で次のことが問題になってきました。それは毎回新しい人が来るわけですが、そのたびに今までの討論の経過と自己紹介等をするため話が分散しやすく、堀り下げて話しにくいということ。もうひとつ、共同体を語ろうという場合、月二回程集まったところで、単に話すだけなら一生かかっても共同体の共の字さえ語れないのではということでした。つまり、共同体を語る場合、言葉だけでは伝えにくい部分をああだこうだと、かってに想像して話したところで評論家のそれでしかなく、共同生活の中で具体的な討論の材料を共有することによって初めて実感を持って語りあえるのではないかということでした。この二つの問題をのりこえて始めて共同体を追求するためには、とにかく共同生活を始めるより他はないんだという考えが毎回出席するメンバー間で煮つめられるのに、その話が出て一ヵ月もからなかったと思います。もちろん、この共同生活は必要なものとして考えられると同時に私達の何人かにとっては望むものでもあったのです。

## 〈スタート〉

共同生活をしようと決まってから三ヵ月間程、準備期間らしきものがありました。それは意識的におこなわれたわけではなく、家を借りるための資金（一人五万円）づくりにどうしてもそれくらいの期間が必要だったのです。後で聞いてみると、その間に一人一人が悩んだそうです。財産を共有し、一つサイフにすることや、生々しい人間関係に入ることに対し、今ならやめれるんだという考えがつきまとっていたと、後日笑いながら話したものです。今考えてみると、この三ヵ月間は討論したことも含めて、心の整理をすることになっていたようです。これは重要なことで、この期間がなかったなら今までこの共同生活が続くことなく途中で分解したのではないかと思っています。

とにかく、個人個人のもつ共同体像を共同生活の中で出して話あってゆき、それによって自分達の共同体像をつくっていくんだという、いわば準備段階としての共同生活（模索共同体と気負っていましたが……）を始めることによって「土が欲しいもぐらの会」が解消し、「ぐるうぷ・もぐら」として再出発したのです。薄いモヤのかかった朝早く、寝ている大家さんをたたき起こしたのを昨日のように思い出します。トラックいっぱいに積んだがらくたと一緒に髪の長い異様な（？）風体の男二人を含んだ六人のメンバーが、赤軍派がきたという噂の中で住みついたのは、東京のはずれの住宅地で、去年の七月の終り頃のことでした。風光明媚で静かな多摩川のそば、どう考えても、もぐらが住むには似つかわしくない所で、大家さんもおっかなびっくりだったとか……。

## 〈試行錯誤〉

はやいもので、それから十ヵ月がたとうとしています。この間に様々なことがありました。最初は、共同体とは他から拘束されることなくすべてが自由であるという発想から、夜おそくまでステレオを聞いている人がいたり、働きたい時働いて、働きたくない時は働かなくていいのだと一ヵ月近く働かない人が

いたり、ひとつひとつがまさに自分達の生活のかかった共同体の討論材料でした。むき出しの感情ジレンマをそのままぶつけ、そこから考えていく作業でしたが、そんなしんどい作業のうらにも、皆しつこく一緒にやっていくんだという暗黙の了解があったので、安心して自分の考えをぶつけていくことができました。私達の中で「言葉の肉体化」という表現をします。それは問題を具体的な行動を通じて考え、そこで自分が感じた感情をもとにして話していくということです。すべてがそうなのでしょうが、何か問題がある場合、それを避けることによってではなく、何故それが生じるかそしてどうするかを考えることによってしか、それは解決できないと思うのです。共同性を志向する場合、人間関係に生じるわだかまりをきれいな言葉でカモフラージュしても、すぐ化けの皮がはげてきます。そのひとつひとつを問題にし考えていくことはしんどいことですが、相手との矛盾をあいまいにして相手を仲間と呼べないと思うのです。逆に相手とのわだかまりの原因をおもいやりという言葉で隠すことなく、しんどくても共に考え、取り去っていく努力の中ではじめて仲間だと感じることができるでしょう。もちろんこのことは、自分のすべての行動を理論づけて説明しなければならないということではありません。互いに相容れない部分があるとはっきりしている場合、それを避けてもどうしようもないということです。

私は強く感じるのですが、話して共に考える場合の姿勢は、共同体を語る場合特に重要なことだと思います。というのは、自分だけ得をしようとか、相手に対する憎しみとかがない限り、対立するとすればお互いのイメージの違いで対立するわけです。そこで問題になるのは、今までお互いの中に形成されてきた考え方、習慣、感情の違いといったものは、何故なのかということです。わるくいえば、自分の考える相手の弱み、みにくい面、限界といったものをつき出す作業でもあります。この時、自分はいつこの場を出ていくかわからないとか、考えはいつかわるかわからないということを、大上段にふりかぶってしまえば話ができなくなります。もちろん、別に運命共同体的に死ぬまで一緒に生きていかなければならないんだというのではありません。どうしようもない情況の場合、その場を出る可能性があるのは共同体においても同じです。ですから問題はそんなことではなく、共同生活のなかで共同性について語る場合、共に考え、そのしんどさをのりこえ新しい何かを創っていこうとする真摯さのもとに、現在の自分を語ろうとする姿勢が不可欠だと思うのです。

## 〈共働を通じて〉

十月の中頃から私達は自分達でひとつの仕事をもつことにしました。それまで個人個人の仕事がばらばらだったので、話す時間を少しでも増すためと、収入の安定性をはかるためでした。これはコミュニケイトのうえで大きな効果を持ちえたようです。仕事自体は工事現場廻りの少し危険な仕事で、創造の喜びなどといったものからはほど遠いものでしたが、自分達で下請けしたため、労務管理といったものがなく、比較的自由に仕事をしながら話すことができました。最初は見習いのため、一日二千五百円という賃金で、朝六時半には家を出、夜七時頃帰宅の毎日で、三ヵ月程続きました。今は見習いから独立して、かなり収入のいい仕事になり、ある程度自由な時間を持つ余裕ができてきました。この仕事を覚える間は、体が疲れるためか、帰るとこ



たつでいつの間にか眠ってしまう毎日で、女性のメンバーから、何のために働いているのかわからないとよくいわれたものです。

この仕事を通じて、何がプラスになったのか、私なりに考えています。今、思いつく範囲では、次のことがあげられるでしょう。

ひとつは、時間からもわかると思いますが、かなりしんどい毎日だったわけです。そのしんどさによって、自分は何でこんなことまでして共同生活の場を維持しようとしているのかという問いかけが、常に皆につきつけられていたと思うのです。そこでは、自分の求めるものは何かということを具体的にさしせまったものとして展開する必要がおきるわけです。誰かが、「豊かな感受性のもとに、自由への情熱を持った人間が多いにもかかわらず、その多くが生活の重たさの前にむなしく挫折していく。これは自由の概念がイメージのまま、生活の中に組み込む努力がなされていないのではないか。」と言っていました。共同体を志向する場合、まさにそうだと思うのです。生計のための仕事はもちろん、事務的な能力を含め、日常的なレベルで取り込むときに、自分の求める自由をどれだけどういうふうに日常生活に盛り込めるかだと思います。

それから、仕事を共にやるなかで、単に話すだけの相手からは見い出せない性格が、だんだんはっきりしてきたこともあげられるでしょう。相手の性格を仕事を通じて知ることによって、安心して話せるようになった気がします。

次に、これは金銭的なことでもあるわけですが、農場をつくろうとか、共同体をつくろうという場合、金銭的にどのくらい可能かということが、どうしてもでてくるわけですが、これに関しては、今まで全く検討もできなかったことが、この仕事を通じて、このくらいまではなんとかなるんだといった比較的具体的な数字としてでてきたことです。これは、金銭を一緒にして別に制限しなくても一緒にやっていけるんだといった共同生活の能力を身につけつつあることとあいまって、ある種の自信を持つことに役だったと思うのです。もちろん、この仕事を通じて、現在の社会のしくみといったものを、身をもって考えさせられているということは言うまでもありません。

## 〈外部との交流〉

現在、もぐらのメンバーは、男四人、女四人の計八人で、他に三人がわらじをぬいで(?)いますので、計十一人の共同生活です。男性は、全員現場関係の仕事、女性は各自、他の仕事か学校へ行っています。メンバーの平均年令は二十一才位で、四人は学生です。家を一軒かりていますが、家賃は七万(相場からいくと、これでも安いのですが……)で、高いかわりに八部屋はあり、空間的な規制からくるジレンマは少ないつもりです。財布はもちろんひとつにしてあり、すべて共有。生活習慣らしきものはできつつありますが、成文化された規則というものはありません。強いて述べるなら、メンバーとしてもぐらに加わる場合、共同体を創っていくものとして、常に自分が何故ここにいて、何をしようとしているのか見つめる姿勢を要求されることくらいでしょうか……。

そういえば、最近、もぐらを訪ねられる方に関して条件をつけようということになりました。それは、今までの生活体験の中で感じてきたことにもとづくのですが、もぐらに滞在する場合、特別な場合以外は、もぐらで仕事も一緒にやるということです。というのは、今まで何人かの人が、共同体は開かれたものだ、そして共同体においては仕事をしたい人

がすればいいし、規制なんてナンセンスだという発想のもとに入ってきました。このような発想で入ってこられると、人数が少ないうえ毎日が忙しい私達にとって、その人はすごいジレンマの対象なのです。それにもぐらに来られるからには、もぐらに何らかの関心を持っていられると思うのですが、限られた時間内で十分に話すことはできず、かといって、初めて来たその人のために、いちいち生活のリズムを狂わす余裕もないのです。ですからどうしても現場にいく車の中とか、昼休みとか、仕事をしながら話すということになってきます。

これに関しては、「外部とのコミュニケーションともぐら」といったふうに話をすすめたほうがいいかもしれません。もぐらでは、「土ともぐら」というアピール紙の復刊を意図してはいますが、現在は何もだしておりません。それに、マスコミの取材は、絶対に受け入れないという態度をとっています。このことは、マスコミが興味本位にしか取扱わず自分達の伝えたいことが十分伝わらないということだけでなく、そのマスコミを通じてもぐらを知った人が、様々なイメージを持ってくりこんで来ることに対する恐怖です。知りあって全員がまだ一年半もたっていないとはいえ、読書会を通じて自然に集まった八人そこそこのメンバーが新しい生活形態をと、どじりながら模索しているところに、いれかわりたちかわり自分なりのイメージを持ちこんでくる人達のことを想像してみて下さい。自由を求め共同体を求めるといった形で、あちこち見てまわることは意義あることだし、素晴しいと思うのですが、既成の共同体といったものに、自分のイメージを比較し評論するだけの人と、その中に飛び込んで考えるか、自分なりに共同体を創ろうとジレンマしている人とではその思考に決定的に違ったものがあると思うのです。イメージというものは、互いに言葉でぶつけるだけでは、堀り下げれば堀り下げるほどくい違ってくるものだと思います。それは異った生活体験を今までしてきたということなのでしょうが、だとすれば、共に行動することによって、互いに考えていく中でしか、くい違いをのりこえてイメージを共に展開し、自分達のものとして生活のなかに組み込むことはできないと思うのです。ですから、共同体を創ろうという場合、共同性を追求する姿勢さえあれば、共同体論が一致したからやろうというのではなくとも、何人か集まって共に考えていく作業を通じてはっきりさせていけば、十分可能だと思います。むしろ、そこから出発するより他にないとさえ思うのです。この場合、その共同体が拡大することをいとわない限り、後から新しいメンバーが加わってくるわけですが、入りたいです、ああそうですかといった形ですぐ引き受ければいいかもしれませんが、初期段階では、自分達のことに精一杯でそれだけの力量がないのが実情かと思います。今までの例からみますと、人の紹介で来て、読書会や自主講座に顔を出し、その中である程度知りあい、心の準備ができてから入って来る人の方が、拒否反応は少ないようです。そんな訳で、もぐらを訪ねてこられる場合、できるだけ月二回の「月刊キブツ府中読書会」に顔を出されることを望みます。これは自分達の生活のリズムを乱したくないということと同時に、その時でしたら、話す準備もしていますから、来られる人も気楽に話せると思うのです。

## 〈悪意のない相剋〉

最近、ある程度余裕ができて、皆があちこちに顔を出したり、自主講座や読書会の時間をとれるようになってきました。自主講座は、



私は毎日でもやりたいのですが、今はそこまでいっていません。自主講座に関しては、各人の位置付けは様々ですが、私はその必要性を痛切に感じます。というのは、共同生活をしていれば、当然、感情的な対立が生じてきます。その場合、前にも述べましたように、何故それがおきるのか考えねばなりません。共同性とは、単に相手がそこにいるということで感じる気分だけではなく、向共同性だと思うのですが、まさに、いかに共同性を志向するかが重要だと思うのです。私達一人一人は、違った生活史のなかで、違った考え方を身につけてきました。そこに住んでいた人たちは、一人一人が多分いい人で、本心から相手をおとしいれようとか、憎もうとか意図してないにもかかわらず、結果的には憎んだりけなしたりしてしまう機構を、その生活形態自体が持っていました。それは、現在のこの社会でもあるわけです。私達の育ってきたこの場所は、愛情豊かな人達が結果的に疎外しあってしまう所で、私達は無意識のうちに、相手を疎外してしまう考え方と感情を身につけていると思うのです。W・ライヒは、このような情況で育った人間すべてに、多かれ少なかれ、精神の病い（性格鎧装）を見ています。彼の精神分析治療は、抑圧された衝動を意識化することによってなされたわけですが、私達自身にもそれがいえると思うのです。私達は、現在の社会のなかで、互いに愛しあって生きていこうという情熱と努力がこの社会機構の中でつながることなく、いかに分断され、無意味化され、かすめとられてしまうのか、共に学んでいく必要があるでしょう。そうした時、自主講座は、自分達の日常生活を見つめなおし、感情的な対立の原因に目を向けさせるだけでなく、共同体で展開できるかもしれない自分達の夢、可能性といったものを共に考え、共有し、共同体への情熱を培う、有効な手段になると思います。今、もぐらで、自主講座に使っている本は、『月刊キブツ』と真木悠介の『人間解放の理論のために』で、他はいろんなところから自由に資料をもちよるようにしています。

## 〈「……ぶる」からの脱皮〉

共同生活は、わずらわしいだろうとのことですが、それは今のところ、確かにそうだと思います。ただし、そんな面もあるという意味です。それなりのジレンマはあるのですが、そのひとつひとつが話を重ねるなかで、鎧を一枚一枚脱いでいくようにお互いにわかっていき、そこにできてくる親密さは素晴しいものです。一人で都会に生きているんだと、孤独ぶったり、悲壮ぶったりした昔が、今では微笑ましい感じです。「おれたちは、淋しがりやだから一緒に住んでいるんだ」とメンバーの一人がいつか言ってたのを思い出しますが、共同生活は楽しいし、素晴しいと思います。多分、わずらわしい分をたっぷり差引いたところで、十分すぎるおつりがくるはずです。そして、その楽しさが、共同生活をしている一人一人の重さとして現在の社会の人間疎外の機構と結びつけて意識され、自分達のいる場を変革していく楽しさとなった時、私は、そこに共同体と呼べるものができたと思うのです。もぐらのメンバーのほとんどにいえることだと思うのですが、皆を解放するんだとか、解放してやるんだという意識は、多分無いでしょう。自分が現状に生きるのがいやだから、もっと疎外関係を拒否して生きたいから共同体を追求するんだということです。それは、共同体を通じて社会を考えていこうという試みでもあると思います。

現在、多くの人が共同体を志向しておられ

るようです。その人達は、自分のいる場所で仲間をあつめ、共同生活に入られるといいと思います。共同体、共同体と、何もそう固くるしく考えることなく、皆で共に生活し、学習し、その場をどんなふうに変えていくかを一緒に考えてやっていく場としてあればいいのです。ひとつの試みが失敗したとしても、多分、何人かの人間的なつながりができると思いますし、その場から多くを学べるし、自らやっていく意志があるかぎり、手ごたえのあるものだと確信しています。そんなグループがひとつでも多くできれば、より豊富なイメージを持って、グループ間で、共同体と共同体の関係をどうするかと、自由連合的に追求できるかと考えます。

## 〈緑の風〉

今日は四月三〇日、原稿の〆切り日にあわてて書いています。今、メンバーの二人は、工事現場へ朝六時半から仕事にでかけ、二人が畑へ、農業関係の大学に入っている娘は田舎、一人は山岸会へ、そして保母さんの学校へ通っている娘はリヴの演説会へと散っており、家の中は静かです。勉強部屋から見える青い空には、白い雲がのんびり流れていきます。木の多い住宅地のせいか、風は緑に匂ってきます。このおなじ緑の風の中で、人と人が憎しみ合い、殺し合い、差別しあい、自分自身の生さえもが歪められているということが、本当にありうるのかと思ったりします。だけど、個々に分断された私達の生は、いつのまにか、自らが自分の自由と他人の自由というふうに、この世界に境界線を引くことに慣れ、ここまでは私、そこからはあなたと、互いに疎外し合い、憎しみ合うそれでしかないのは、まぎれもない事実のようです。そんな私達の生活空間を吹き抜けていく緑の風は、自分の領域を広げるために、他人の領域を狭めようと苦悩するよりも、人と人を分断している境界線を否定していく喜びをと、語りかけてくるようです。……そして、この共同生活で感じるのは、自由だ、平等だと何百回唱えるよりも、物理的にも精神的にも分断されている私達の生活基盤の中にある境界線をひとつでも取り去ろうとする努力の必要性です。それは、同時に新しいどんな別の関係を創っていくかということなのですが、今は、志向し、行動するなかで考えていくことが必要なのだということしか書けません。S・ヴェイユの次の言葉は印象的です。

「愛とは、気分ではなく、志向であることを知らねばならない。」……あなたは、どう思われますか？

（筆者は「ぐるうぷ・もぐら」在住　共同体に関する読書会も行なっている。）

♣　♣

**14ページよりつづき**

なたはここにいればいつまでも幸せですよ、という幻想を抱かせるよりは個を尊重したひびきを感じる。

振出塾の住人がここには役割も意義もないんだといおうとも、ここが果してきた役割はやはり「はみだし者のふきだまり場」となることに徹したことにあるだろう。これと同じようなシステムをもち同じような行き方をしようとする試みがいくつも発生する余地は十分にあるし、こういった場の存在を必要としている若者もたくさんいるのである。



《海外ミニ情報》

# ワン（ONE）

## ——知識・才能の解放区

最近「モダン・ユートピアン」編集者から送られた情報によると、サンフランシスコの中心街で面白い試みが行なわれている。一言でいったらその街の中にある空いた倉庫での実験は、物や思想の共有よりも個人の才能の共有といえる。提唱者で住人のラルフ・スコットは今までのコミューン運動との違いを「前世紀的なコミュニティーは誰かが目標を設定して、みんなが実現めざして働いた。我われの目標は、他の行動でも同じだが、街の中での異なる必要と現実に対応して刻々変わる。ここはユートピアをめざすものではない。」と説明する。

サンフランシスコ市内から企業は、もっと地価の安い郊外地を求めて出て行きつつあり、そのため市内中心部には六〇余りのあいた倉庫が残った。建築・音楽家のラルフ・スコットらはそこに目をつけ、好意的な所有者から地下四階、地上二階建ての空倉庫を年額五万ドルで借りることにした。床面積が八万四千平方フィートある。

現代において工業技術者、芸術家、音楽家たちは、経済生活と才能を生かす生活との矛盾に苦しんでいる。更に、個室化され閉じこめられた生活では、人間の集まる自由な場としての都市の利点が死んでしまう。この二点を一挙に解決する方法として、特殊な才能を持ち、それを生かしたいと思っている人びとが拘束されず、しかも才能を共有できる雰囲気を作らねばならない。

倉庫に使われていたので、ただ広々としたコンクリートの床と柱だけあって「部屋」はない。ここでは四本の柱に区切られた一区画を「ベイ」と称して最少単位として貸している。一平方フィートあたり月額六・五セント、一ベイ約二三ドルが相場。ここでは「私は空間（スペース）を持っている」と言い、「部屋」という閉じたひびきの言葉を使わない。

最初の五万ドルを集めるのにラジオ、雑誌をおおいに利用して、同じような悩み、ないしは好奇心を持っている仲間を募った。結果六〇団体二百人が瞬くまに集まった。

まずやらねばならなかったのは、壁を造り空間を仕切ること、防火壁を築くこと、電気配線をすること、など彼らが存在は知っていたがいかに造るか全く知ることのなかったことどもだった。実に勉強になった。これでスペースへの、共働者への親しみがぐんと増した。勿論このスペースは固定していない。様々な形の、飾りつけのスペースが迷路のように続いている。新居住者はまた、自分の好むように造り直す。

指導者も管理人もいない。出欠自由のミーティングで会計報告、自由学校構想、デモの提起が漠然となされる。ひとりでも反対者がいたら提案は採択されない。家賃集めは当番が責任を負う。

無論問題はある。コンクリートの床、急造のスペースは快適ではない。心理的他者依存が起こる場合もある。しかし一般には個人的義務は黙って果たす風潮が支配している。結局、この生活は成長の契機を含んでいるといえよう。『モダン・ユートピアン』の連絡先は下記の通り。ALTERNATIVES FOUNDATION, P.O. Drawer A, Diamond Hghts. Sta.,San Francisco, Calif. 94131